

「AハBがVテアル」構文の特徴分析

－「AハBがVテアル」構文と「AハBがVラレテイル」構文との比較を中心に－*

裴 銀 貞**

(e-mail: ejbae111@bufs.ac.kr)

【Abstract】

In this paper, I analyzed the meaning of ‘Awha Bga Vtearu’ sentence and ‘Awha Bga Vrareteiru’ sentence with double subject structure. There were some precedent studies to compare ‘rareteiru’ and ‘tearu’, but The study about ‘rareteiru’ and ‘tearu’ to take the form of the double subject sentence structure into was not found. Therefore, in this paper, I paid attention to two sentences mentioned above and decided to compare and analyze it.

As a result of analysis, it was ‘tearu’ sentence to be liked as a structure to express an effective aspect generally by a Japanese mother tongue speaker. but When the sentence with the double subject expressing an effective aspect is accompanied by, It was confirmed that the Japanese mother tongue speaker preferred ‘tearu’ to ‘rareteiru’.

The next, it was confirmed that a noun not to express a position is more natural than a noun to express a position.

Finally, it was said that the ‘Awha Bga Vtearu’ sentence was near a sentence expressing ‘characterization of A’ rather than ‘a position’ in the paper of Ooh(2009). And as a result of consideration, a sentence of the noun expressing a position was used for ‘A’ was felt more naturally, but the

* 이 논문은 2014년도 정부(교육부)의 재원으로 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 기초연구사업임 (과제번호: 2014S1A5A2A01011542)

**釜山外國語大學校 日本語創意融合學部、副教授、日本語文法論

difference was not big.

key words : A sentence with double subject structure, 'Awha Bga *Vtearu* 'sentence
'Awha Bga *Vrareteiru* 'sentence, The degree of the naturalness,
Noun to express a position, Noun not to express a position

1. はじめに

本稿では、文述語「BがV」を持ち、大主語「A」をとっている「AハBがVテアル」文の特徴について考察したい。「AハBがVテアル」文の例としては以下の例文(1)(2)が挙げられる。

- (1) 下二段の引き出しは縫いかえた普段着、洗い張りもの、萎えた下着、足袋などが押し込んである。
(呉(2009))
- (2) 軍刀を握った左手の白手袋は、人差指と中指のところが糸でくけてある。 (呉(2009))

上記の例文(1)(2)は、それぞれ大主語「引き出し」と「白手袋」が、文述語「下着、足袋などが押し込んである」、「人差指と中指のところが糸でくけてある」の大主語として機能している大主語構文である。大主語構文というのは「象は鼻が長い」という例文として代表され、「AハBがC」という格形式を持っているため、二重主語構文とも呼ばれる構文のことを指す。

従来、結果相を表す「他動詞+テアル」文は、意味的類似性のため「受身動詞+テイル」文との比較分析が行われてきた。幾つかの先行研究を通じ、両構文の類似点及び相違点が指摘されてきたが、それぞれ「AがVテアル」型と「AがVラレテイル」型をとっている構文のみの比較分析に止まり、より多様な格形式までカバーできる比較分析までは至っていないのが現状のようである。

実際、「受身動詞+テイル」文の中でも上記のような大主語構文の形をとっている場合が存在しており、大主語の結果状態を表している点では「AハBがVテアル」文とごく類似している。

- (3) NHKは料金制度で経営が保障されている半面、放送法でさまざまな規制を受け、私企業の新聞や民放にくらべ制約が多い。(社説)
- (4) 百貨店ニュース社は三方が広い窓に囲まれているので想像していた風景よりもずっと明るかったが、社内の空気はあまり陽気というようなものでもなかった。(社説)

上記の「AハBがVラレテイル」型のような格形式をとっている大主語構文の場合、筆者(2007)により考察が行われ、その意味的特徴についても分析されたことがあるが、これと同様、結果相を表す大主語構文である「AハBがVテアル」型の意味特徴についてはいまだに明らかにされていない。しかも、「AハBがVラレテイル」文と「AハBがVテアル」文との比較分析も行われたことがない。

そこで本稿では、意味的・形態的類似性を持つ「AハBがVラレテイル」文と「AハBがVテアル」文との比較分析を中心に、従来、注目されてこなかった大主語構文「AハBがVテアル」文の意味的特徴をより明確にすることを目的とした。

2. 先行研究の検討及び問題の提起

2.1 先行研究の検討

従来「テアル」「ラレテイル」構文に関しては、森田(1977、1987)、益岡(1984、1987)、寺村(1984)、崔(1992)、山崎(1996)、杉村(1996、2002)、原沢(1998、2005)、李(2001)、鈴木(2002、2004)、浦木(2006、2010)、神永(2008)、福島(2009)、斎藤(2010)、張(2010)、中俣(2011)、呉(2012)など数多くの研究が成されてきた。主に「AがVテアル」、あるいは「AヲVテアル」の格形式をとっている「テアル」構文の意味的特徴をより詳細に分析する形で研究が進められてきた。

この中で「テアル」文と「ラレテイル」文との比較分析を扱っている研究としては、崔(1992)、金(1998)、李(2001)、原沢(2005)、金水(2009)、斎藤(2010)、筆者(2008a)、(2008b)、(2008c)、(2008d)、(2009)などが挙げられ、「AがVテアル」あるいは「AヲVテアル」の格形式ではなく、より細かい格形式の違いまで視野に入れ「テアル」構文の研究を行っている例としては、呉(2009)が挙げられる。氏は、本稿の主な考察対象である「AハBがVテアル」文の意味特徴について注目し、その意味特徴について分析を行っている。

一方、「AハBがVテアル」文と同様、本稿で主な考察対象としている「AハBがVラレテイル」文に関する先行研究として筆者(2008c)が挙げられ、これと類似した構文である「AハBヲVラレテイル」文との比較分析を行っている。

以下、本稿の研究内容と密接に関わっていると考えられる①「AがVテアル」文と「AがVラレテイル」文との比較分析に関する先行研究幾つかと、②「AハBがVテアル」文、「AハBがVラレテイル」文の意味特徴を分析した呉(2009)、筆者(2008c)の主な内容を概観することにする。

2.1.1 「AがVテアル」文と「AがVラレテイル」文との比較分析に関する先行研究

「AがVテアル」文と「AがVラレテイル」文との比較分析に関する主な先行研究として、寺村(1984)、崔(1992)、金(1998)、李(2001)、原沢(2005)、筆者(2008b)、斎藤(2010)などが挙げられる。これらの先行研究では、「AがVテアル」文と「AがVラレテイル」文

が表す意味的な違いはどこにあるのかを中心に両構文が比較されており、その主な内容は以下の【表1】のようである。

【表1】 先行研究で見られた「AがVテアル」文と「AがVラレテイル」文の特徴比較

	「AがVテアル」文	「AがVラレテイル」文
寺村 (1984)	①意図性のある客体変化を表す。 ②行為の結果ではなく、ある対象の形をそのまま形容する場合には用いられにくい。 ③主語が人間であると不自然。	①意図性のない客体変化を表す。 ②行為の結果ではなく、ある対象の形をそのまま形容する場合には用いられにくい。 ③主語が人間であると不自然。
崔 (1992)	①意図性のある客体変化を表す。 ②行為主体は義務的に削除される。 ③無情物主語のみ可能	①意図性のない客体変化を表す。 ②行為主体は義務的に削除される。 ③有情物主語でも可能
金 (1998)	①動作主(行為主体)が文の上省略される必要がある。 ②意図性のある行為の結果を表す。 ③被害の意味のない行為の結果を表す。 ④意志の結果ではない、自然的な状態性は表せない。	①動作主(行為主体)の省略は義務的ではない。 ②意図性のない行為の結果を表す。 ③被害の意味がある行為の結果を表す。 ④意志の結果ではない、自然的な状態性が表せる
李 (2001)	①動作主(行為主体)が文の上省略される。 ②「AがVラレテアル」文と同様、目で把握できる現象を表すのに用いられる。	①動作主(行為主体)の省略は義務的ではない。 ②目で把握できない現象を表す動詞に限られ用いられる傾向がある。
原沢 (2005)	非行為的状态 ¹⁾ を表すのに用いられる「AがVテアル」文の場合、「AがVラレテイル」文の場合、置き換えが可能であるが、実際、どのように使われられるのかは今後の課題とする。	
筆者 (2008b)	書く、置くという一部の動詞類が主に「AがVテアル」文をとり行為の結果を表す。 「AがVテアル」文の場合、非行為状態を表せる場合はごく制限されている。すなわち、「AがVテアル」文における主な機能は「行為の結果」であり、「非行為状態」でないことがわかる。	①書く、置くを除いた殆んど動詞類が「AがVラレテイル」文をとり、行為の結果を表す。より広範囲的に用いられるタイプ。
斎藤 (2010)	①人が行う行為のみ「テアル」文で示される。 ②人の動作を表す動詞のうち、動詞が結果を生じない場合、「テアル」文は用いられない。 ③動作を表す動詞が結果を残す動詞で	①人が行う行為ではない場合「ラレテイル」文が用いられる。 ②動詞が結果を生じない場合であるかどうかと関係なく、「ラレテイル」文は成立する。 ③動作を表す動詞が結果を残す動詞である場合「ラレテイル」文も用いられる。この

	ある場合「テアル」文が用いられる。	際、「テアル」文との置き換えも可能であるが、「ラレテイル」文が進行相を表す場合に限り「テアル」文への置き換えは不可能となる。
--	-------------------	--

いずれの先行研究でも「AがVテアル」型及び、「AがVラレテイル」型という格パターンをとっている構文同士の意味特徴を比較しており、それぞれの構文が表す意図性の有無、動作主の省略如何、被害の意味合いの有無などの違いについて論じている。

しかし、「テアル」文と「ラレテイル」文の違いを概括的に扱おうとしている先行研究がほとんどであり、それぞれの構文の格パターンの違いまで視野に入れ、詳細な分析を行っている場合はないことがわかる。

2.1.2 「AハBがVテアル」文及び「AハBがVラレテイル」文の意味特徴を分析した先行研究

本節では「AがVテアル」構文及び「AがVラレテイル」構文を対象に、下位格パターンの違いを考慮した形で分析を行っている主な先行研究を概観する。まず、「AがVテアル」構文の下位構文の分析を行っている呉(2009)の研究から見てみよう。呉(2009)では、「AがVテアル」構文のうち「AハBがVテアル」型及び「AハBヲVテアル」型の格パターンをとっている構文の特徴を分析している。

氏は「AハBヲVテアル」構文と「AハBがVテアル」構文の例として下記例文(5)～(8)などを取り上げている。

- (5)大里屋も吉浦も、二軒とも表戸をおろしてあった。「ただいま」玄関の戸を開けた。
(呉(2009)：p.94例(22))
- (6)その室のも彼の見慣れた形式の生け方のものだったが、その向こうの広い応接間は、カーペットを引き剥がして前衛派風の、石や金属片やセメントのカケラやパイプなどを使った超現実派の絵の模倣らしい作品を並べてあった。(呉(2009)：p.94例(21))
- (7)鳥の運動場は金網で囲いが作ってある。その囲いの柱がひどく一方に傾いたので、金網全体がそっちの方へゆがんで了っていた。(呉(2009)：p.94例(18))
- (8)残り三分の二は武器の諸元、扱い方、分解の要領などが挿絵入りで解説してある。
(呉(2009)：p.94例(17))

1) 非行為状態とは、外部からの行為による結果ではなく、対象がもともと備えている属性を表す「テアル」用法のことを指す。例えば、「〇〇社の便せんは赤い線がひいてある / 君の顔に「さびしい」って書いてある」などの例がある。いずれも誰かが線を引いたり、さびしいという字を書いた結果の状態を表しているのではなく、外部からの行為は起っていないものの、対象の属性に近い「状態」を表していることがわかる。

氏は、「AハBヲVテアル」構文及び「AハBガVテアル」構文の特徴として、いずれも下記例文(9)のような「AニBヲ(ガ)Vテアル」構文がその由来であると指摘している。

(9)部屋の壁際に据えてある紫壇の飾棚の、観音びらきになった戸をあけると、中に小さい箱がしまつてある。
(呉(2009)：p.98例(8))

すなわち、「AハBヲVテアル」構文及び「AハBガVテアル」構文は、「AニBヲ(ガ)Vテアル」構文の二格名詞である「A」を「～ハ」の形として取り立て、主語を加えた文構造として変わった構文であると規定している。つまり、殆んどの「AハBヲVテアル」/「AハBガVテアル」構文の「A」は、もともとは「ニ」格をとる、「場所」や「空間」を前提としていることを主張しているのである。但し、名詞「A」がニ格をとる「AニBヲ(ガ)Vテアル」構文と、名詞「A」がハ格をとる「AハBヲVテアル」/「AハBガVテアル」構文との違いはあると付け加えている。

つまり、三つの構文はいずれも、「物の位置を**視覚的**に捉えられる事柄」という点は共通しているものの、「AニBヲ(ガ)Vテアル」構文は「**存在文**」に近いのに対し、「AハBヲVテアル」/「AハBガVテアル」構文の場合、「テアル」節によって特徴づけられる「**A**」の**属性を表すための文**に近いと主張している。

従来「テアル」構文の分析を格パターン別に下位分類し、詳細に分析した先行研究が殆んどなかったことを考えると、氏の見方は新鮮で、興味深い点が多い。但し、「AニBヲ(ガ)Vテアル」構文は存在文に近く、「AハBヲVテアル」構文及び「AハBガVテアル」構文は「特徴づけ文」に近いということを主張はしているものの、検証にまで至っていないのが問題点として指摘できる。すなわち、なぜ「AハBヲVテアル」構文及び「AハBガVテアル」構文が位置を強調する「存在文」ではなく、「特徴づけ文」に近いのかを証明できるような根拠は殆んど触れておらず、「AニBヲ(ガ)Vテアル」構文のように位置を表している文ではない、という主張で終わってしまったのは見直しの余地があると判断される。

また、「AハBヲVテアル」構文と「AハBガVテアル」構文がいずれも「特徴づけの文」であることは指摘しているものの、実際、両構文に相違点はないのかについてはまったく触れられていないことも補完の余地がある。実際、「AハBヲVテアル」構文と「AハBガVテアル」構文は名詞「B」がそれぞれ異なる助詞をとっているため、意味的な違いも予想され得るが、相違点については殆んど触れられていないのは問題であると判断される。

ここまでは、「AガVテアル」型の下位類型について分析した先行研究の内容を概観したが、次は「AガVラレテイル」型の下位類型を分析した研究について触れてみよう。

「AガVラレテイル」型の、結果相を表す受身文の類型別分析を行っている研究として

裴銀貞(2008c)が取り上げられるが、ここでは、「A^ハBヲVサレテイル」型と「A^ハBガVサレテイル」型受身文はどのような意味的特徴を持っているのかについて分析が行われている。

裴銀貞(2008c)では、下記例文(10)~(11)ように、結果相を表す「A^ハBヲVサレテイル」型受身文と「A^ハBガVサレテイル」型受身文を比較し、20人の日本語母語話者を対象とし、両文のうち、より強い結果相を表す構文はどれかについて調べてもらった。その結果、結果相を表せる度合いにおいては「A^ハ(ガ)BガVサレテイル」型受身文が「A^ハ(ガ)BヲVサレテイル」型受身文より優位にあることを明らかにした。

- (10)a. 次郎**は(ガ)**歯**を**折られている。
 b. 警官の一人**は(ガ)**耳**を**切られていた。
- (11)a. 次郎**は(ガ)**歯**が**折られている。
 b. 警官の一人**は(ガ)**耳**が**切られていた。

また、新聞、小説、雑誌など実例で用いられている「A^ハBヲVサレテイル」型受身文と「A^ハBガVサレテイル」型受身文の実例を収集し、実例で用いられる頻度の多い構文は何かについても調べた。その結果、実例では「A^ハ(ガ)BヲVサレテイル」型受身文が「A^ハ(ガ)BガVサレテイル」型受身文に比べより頻繁に用いられていることが明確になった。

このように裴銀貞(2008c)では、「A^ハBヲVサレテイル」型受身文と「A^ハBガVサレテイル」型受身文を比較し、出現頻度の違い及び結果相を表す度合いに違いがあることについて考察した。

以上、「A^ハBガVテアル」文及び「A^ハBガVラレテイル」文の意味特徴にていて分析を行った先行研究をまとめたが、結果相を表す「テアル」構文と「ラレテイル」構文の比較分析を格パターンの多様性まで考慮にいった形での研究はごく少ないことがわかる。特に、「A^ハBガVテアル」構文と「A^ハBガVラレテイル」構文を比較分析している先行研究は一件も見当たらないことが確認される。

特に、「A^ハBガ(ヲ)Vテアル」の意味特徴を分析した呉(2009)の場合、「A^ハBガVテアル」構文が一般的な「テアル」構文とは違って、位置、存在を強調する構文ではなくAの特徴づけ文であると主張しているわりには、主張の根拠が十分ではない問題点が見受けられた。

呉(2009)では「A^ハBヲVテアル」構文及び「A^ハBガVテアル」構文は、「A^ニBヲ(ガ)Vテアル」構文の場所名詞である「A」がその由来である場合が多いと指摘しながらも、結論では「A^ハBヲVテアル」構文及び「A^ハBガVテアル」構文は存在文というよりも特徴づけ文に近いと結論づけており、そのような結論づけの根拠が曖昧である。

そこで本稿では、「AハBヲVテアル」構文及び「AハBガVテアル」構文を位置を強調する文ではなく<位置づけ文>として規定した呉(2009)の主張を検証する作業を行いたい。但し、呉(2009)では「AハBヲVテアル」構文及び「AハBガVテアル」構文を同一の形として捉え、同じ構文扱いをしたが、ここではBが「ヲ格」をとる構文は考察対象とせず、Bが「ガ格」をとる構文だけを対象とし、この例文が<位置づけ文>としての属性を有しているのかについて迫りたい。該当名詞が助詞「ヲ」格をとる場合と「ガ」格をとる場合は、助詞の違いに伴う意味的なずれがあり得るため、本稿では、典型的な大主語構文の格助詞をとっている「AハBガVテアル」構文だけを「テアル」構文の考察対象として絞る。

その次に、本稿では「AハBガVテアル」構文と形態的に類似している「AハBガVラレテイル」構文も考察対象に加え、「AハBガVテアル」構文と「AハBガVラレテイル」構文の意味的違いと、結果相を表す大主語構文における、両構文の位置づけについても明確にしたい。

3. 考察の結果

本節では、以下の考察内容を中心に考察を行いたい。

<本稿の考察内容>

- [1] 呉(2009)では「AハBガVテアル」構文が位置を表すための文と言うより「A」の<特徴づけ文>に近いと規定している。本稿ではその根拠について検証。
- [2] 「AハBガVテアル」構文と形態的に類似している「AハBガVラレテイル」構文の場合、位置を表すための文なのか、特徴づけを表すための文なのかについて考察。

本稿では、まず[1]の結果を導き出すため、次のような方法で考察を行った。「AハBガVテアル」構文の「A」に、位置を表す名詞が入る場合と位置ではない名詞が入る場合の例文をそれぞれ作り、各例文を日本人母語話者に見せる。それから、両方の例文のうち、どちらの例文がより自然に感じられるのかを日本人母語話者に判断してもらい、「AハBガVテアル」構文が「A」の<特徴づけ文>に近いのかを検証する。

例えば、下記の例文(12)は「A」に位置ではない名詞が用いられる場合であり、例文(13)は「A」に位置名詞が用いられる場合の例文である。

(12)このチョコレートセットは全種類がきれいな包装紙で包んである。

→ このチョコレート：位置ではない

(13)中村君の机の表面は試験の答えがびっしりと書いてある。

→ 机の表面：答えが書かれている位置

本稿では、「A」に位置を表す名詞が入った際の例文がより自然なのか、位置ではない名詞が入った際の例文がより自然なのかについて調べる。

その方法として、日本人母語話者に各例文の自然さを判断してもらった際、自然で用いられ得る場合は1点、不自然かあるいは用いられない判断される場合は0点をそれぞれの例文につけてもらい、最後、それぞれの例文の自然さを平均点として換算する方法を用いた。日本人母語話者は全て20人であり、「A」に位置名詞が入る「AハBガVテアル」構文8例、位置名詞ではない場合の「AハBガVテアル」構文8例を対象に、それぞれの自然さの平均点を調べた。

次に、上記の[2]〈「AハBガVラレテイル」構文の属性を「AハBガVテアル」構文と比較する方法〉を調べるため、「AハBガVラレテイル」構文の場合も「AハBガVテアル」構文と同様、Aに位置名詞が入る場合とそうでない場合に分け、上述した方法のように自然さを調べた。

まず、「A」に位置を表す名詞が用いられる際、「AハBガVテアル」構文の自然さの度合いを調べた結果から確認しておこう。

【表2】 「A」に位置を表す名詞が用いられる際、「AハBガVテアル」構文の自然さの度合い

「AハBガVテアル」構文	自然さの度合い
山田さんの部屋の壁の一面はエスニックっぽい布が掛けてある。	0.56
運動場は金網で囲いが作ってある。	0.38
部屋の一面は白いバラの束が飾ってある。	0.57
机の上は赤い色のメモが置いてある。	0.5
00社の便せんは線が全て赤い色で引いてある。	0.43
中君の机の表面は試験の答えがびっしりと書いてある。	0.5
旅館の部屋は布団が敷いてある。	0.43
このマンションの全ての玄関はCCテレビが設置してある。	0.23
平均	0.45

結果を見ると、「A」に位置を表す名詞が用いられる際、「AハBガVテアル」構文の自然さの平均点は1点満点のうち、0.45点を示している。すなわち、0.5点も下回っており、かなり低い点数であることがわかる。すなわち、位置を表す名詞が「A」に用いられ、大主語構文の形をとる

「A^ハB^ガV^{テアル}」構文を、日本人母語話者はかなり不自然であると判断していることがわかる。これは言い換えれば、「A^ハB^ガV^{テアル}」構文は、位置を強調するための構文とは言いにくいことを意味する。

呉(2009)では「A^ハB^ガV^{テアル}」構文は「A=B^ガV^{テアル}」構文が由来でありながらも、位置を表す存在文と言うよりAの「特徴づけ文」としての属性が強いと主張したが、上記のような結果から見て、このような氏の主張は正しいように見える。

とすれば、「A^ハB^ガV^{テアル}」構文を<Aの特徴づけを強調する文>と規定していいのであろうか。以下の【表3】を見てみよう。

【表3】 「A」が位置名詞ではない「A^ハB^ガV^{テアル}」構文の自然さの度合い

「A ^ハ B ^ガ V ^{テアル} 」構文	自然さの度合い
この生地は裏と表が違う色に染めてある。	0.71
隣のスーパーで売っている焼き魚は骨が全て取り除いてある。	0.54
このテーブルの表面は放水剤が二度塗りしてある。	0.86
この白手袋は人指し指と中指のところが糸でくけてある。	0.25
このチョコレートセットは全種類がきれいな包装紙で包んである。	0.43
このマネキンは髪が短く切っている。	0.36
この机は、表面が何度もペーパー掛けしてある。	0.5
A社の折り紙用の色紙は、折るところが全て表示してある。	0.43
平均	0.51

上記の【表3】は、「A」が位置名詞ではない「A^ハB^ガV^{テアル}」構文の自然さの度合いを日本人母語話者にチェックしてもらった結果である。「A^ハB^ガC」の格パターンをとっており、「B^ガC」という文述部がAの特徴づけを表している大主語構文の形なのである。

結果を見ると、これらの例文の自然さは1点満点で0.51点を示しており、「A」が位置を表す名詞である場合に比べ、若干上昇していることが確認される。但し、自然さ1点満点で0.51点を示したということは、自然さが平均ぐらいに止まっていることを表すため、「A^ハB^ガV^{テアル}」構文が特徴づけを表すために適合している文であるとは断言できない。

すなわち、上記のような結果からすると、「A^ハB^ガV^{テアル}」構文は位置を強調する存在文というより、特徴づけ文に近いと主張した呉(2009)の主張は幾分正しいとも言えるが、だからといって「A^ハB^ガV^{テアル}」構文に特徴づけの要素が強いとは言いがたい。

一方、ここで次の結果を確認してみよう。次の【表4】と【表5】は、上記の【表2】と【表3】と同じ例文の「テアル」の部分だけを「ラレテイル」に変え、「A^ハB^ガVラレテイル」の形として示した例文が、それぞれ自然に成立しているのかを調べた結果である。

【表4】 「A」に位置を表す名詞が用いられる際、「AハBがVラレテイル」
構文の自然さの度合い

「AハBがVラレテイル」構文	自然さの度合い
山田さんの部屋の壁の一面はエスニックつばい布が掛けられている。	0.75
運動場は金網で囲いが作られている。	0.69
部屋の一面は白いバラの束が飾られている。	0.64
机の上は赤い色のメモが置かれている。	0.5
00社の便せんは線が全て赤い色で引かれている。	0.8
中君の机の表面は試験の答えがびっしりと書かれている。	0.57
旅館の部屋は布団が敷かれている。	0.57
このマンションの全ての玄関はCCテレビが設置されている。	0.86
平均	0.67

【表5】 「A」が位置名詞ではない「AハBがVラレテイル」構文の自然さの度合い

「AハBがVラレテイル」構文	自然さの度合い
この生地は裏と表が違う色に染められている。	0.6
隣のスーパーで売っている焼き魚は骨が全て取り除かれている。	0.85
このテーブルの表面は放水剤が二度塗りされている。	0.6
この白手袋は人指し指と中指のところが糸でくけられている。	0.67
このチョコレートセットは全種類がきれいな包装紙で包まれている。	0.71
このマネキンは髪が短く切られている。	0.86
この机は、表面が何度もペーパー掛けされている。	0.86
A社の折り紙用の色紙は、折るところが全て表示されている。	0.93
平均	0.76

まず、上記の【表4】の「述部が「ラレテイル」型をとっており、Aに位置を表す名詞が用いられている場合」を見ると、自然さの度合いは0.67を示していることがわかる。また、【表5】の「述部が「ラレテオリ」型をとっており、Aに位置を表さない名詞が用いられている場合」を見ると、自然さの度合いは0.76を示していることが確認される。述部が「テアル」型をとっている場合との違いを分かりやすく表で示すと次のようになる。

【表6】 「A」に用いられる名詞の属性と「A¹B²がV³テアル(ラレテイル)」構文の自然さの関係

	「A」に位置名詞が用いられる 場合	「A」に位置ではない名 詞が用いられる場合
「A ¹ B ² がV ³ テアル」構文の 自然さの度合い	0.45	0.51
「A ¹ B ² がV ³ ラレテイル」構文 の自然さの度合い	0.67	0.76

結果をまとめると、「A¹B²がC」の大主語構文の格パターンをとっている場合、Aの属性の違いとは別に、「A¹B²がV³テアル」構文よりは「A¹B²がV³ラレテイル」構文の方の自然さがより高いことが確認される。特に「A」に位置ではない名詞が用いられない場合、「A」に位置名詞が用いられる場合よりも自然さが若干高く現れることも確認できる。

上記のような調査結果から、ここでは次のような傾向を読み取ることができる。

- [1] 「テアル」構文よりは「ラレテイル」構文の方が、「A¹B²がC」という大主語構文の形をとりやすい。
- [2] 「テアル」構文「ラレテイル」構文両方も、「A」に位置ではない名詞が用いられる際自然さが高くなり、このような傾向性は「A¹B²がV³ラレテイル」構文でより顕著に見られる。
- [3] 「A¹B²がV³テアル」構文は位置を強調する存在表現というよりもAの特徴づけを表す構文に近いという呉(2009)の主張は、Aが位置名詞ではない場合、「A¹B²がV³テアル」構文の自然さが若干上昇する傾向から見て、ある程度は正しいと言える。但し、その差が大きくはないため、「A¹B²がV³テアル」構文はAの特徴づけを表すための構文であると断言することは難しい。

ここでまず、上記の傾向[1]に注目してみよう。調査の結果を見ると「A¹B²がC」という大主語構文の形が好まれる方は「テアル」構文ではなく、「ラレテイル」構文であることがわかる。筆者(2008a)では、日本人母語話者20人を対象に、結果相を表す形として「テアル」構文と「ラレテイル」構文のどちらを好むかを調べたことがあるが、そこでは、日本人母語話者は結果相を表す表現として「ラレテイル」構文より「テアル」構文を好んでいるという結果が得られた。

とすると、日本人母語話者は大主語構文の形の結果相ではなく、一般的な結果相を表す場合には「テアル」構文を好むのに対し、「A¹B²がC」という大主語構文の形での結果相を表す際には「ラレテイル」構文の形を好んでいることがわかる。

また、「A¹B²がV³テアル」構文も「A¹B²がV³ラレテイル」構文も、Aに位置を表している名詞よりは位置ではない名詞が用いられる方の自然さがより高い傾向も確認できた。これは、程度の違

いはあるものの、「A^ハBがVテアル」構文も「A^ハBがVラレテイル」構文も「A^ハBがC」型の
大主語構文の形をとっている分、「BがC」の文述部がAの特徴づけを表すことに適合してい
る構文であることを意味する。

4. 結論

本稿では、文述語「BがV」を持ち、大主語「A」をとっている「A^ハBがVテアル」文の特徴
を、「A^ハBがVラレテイル」文と比較しながら分析を行った。本稿を通し、確認できた結果は次の
ようにまとめられる。

- [1] 一般に結果相を表す構文として日本人母語話者に好まれる形は「テアル」構文であるとい
う報告がある²⁾ものの、「A^ハBがC」という大主語構文の形をとり結果相を表す場
合、日本人母語話者には「テアル」構文より「ラレテイル」構文が好まれている。
- [2] 「A^ハBがC」の形として自然に成立するためには、「A^ハBがVテアル」文も「A^ハBが
Vラレテイル」文も、「A」に位置ではない名詞が用いられる方の自然さがより高くなる。
特に、このような傾向性は「A^ハBがVラレテイル」構文でより顕著に見られる。
- [3] 呉(2009)では、「A^ハBがVテアル」構文は位置を強調する存在表現というよりもAの特徴づ
けを表す構文に近いと主張している。しかし、本稿の考察の結果を見ると、確か、Aに位置
を表す名詞が用いられる場合より位置ではない名詞が用いられる方の文の自然さが高くな
ったものの、その差は大きくないことがわかった。
従って、「A^ハBがVテアル」構文はAの特徴づけを表すための構文であると断言すること
は難しい。

【参考文献】

- 安藤節子(2012)「コーパスに見るテアル表現の意味用法と共起動詞：日本語教育/学習の観点か
ら」, 『桜美林言語教育論叢』(8), p.1-13, 桜美林大学言語教育研究所
李京保(2004)「シテアル形に関する一考察」『東京外国語大学日本研究教育年報』8,
p.1-19, 東京外国語大学日本過程・留学生課共編

2) 筆者(2008a)を参照されたい。

- 李光秀(2001)「日本語「てある」文의 構造」, 『日語日文学研究』38, p.115-138, 韓国日語日文学会,
- 浦木貴和(2006)「「テアル」構文に関する考察」, 『日本語・日本文化研究』16, p.123-132, 大阪外大日本語講座,
- _____ (2010)「テ形節とスケール構造からみた「テアル」構文の意味分析」, 『日本語・日本文化研究』20, p.51-64,, 大阪外大日本語講座
- 呉幸栄(2012)「してある」と「しておく」の接近 : 《第2「してある」動詞》との対応を中心に日本文学研究 (51), p.114-129, 大東文化大学日本文学会
- 神永正史(2008)「「テアル」構文の動詞構成 : 存在文との近さから」, 『筑波日本語研究』13, p.33-50, 筑波大学大学院日本語学研究室
- 杉村 泰(1996)「形式と意味の研究-「テアル」構文の2種類」 『日本語教育』91,p.61-72 日本語教育学会
- _____ (2002)「意思性のない「テアル」構文について」 『言語文化論集』第XXV巻,1号, p.159-174,
- 斎藤 茂(2008)「「テアル」構文と対象の格表示」 『言語と文明』6, p.113-136, 麗沢大学大学院言語教育研究科
- _____ (2010)「「テアル」構文と受動表現との使い分け-結果を基に動作が行われたと推論することによる制約-」, 『麗沢大学紀要』90, p.131-154, 麗沢大学
- 鈴木泉子(2002)「「テアル」構文について-モノの存在と効果の存在-」 『津田塾大学紀要』32, p.129-139
- _____ (2004)「格交替における意味の関与-「テアル」構文を足掛かりとして-」, 『津田塾大学紀要』36, p.183-196
- 張賢善(2008)「「てある」に関する一考察-「~ている」との関係において-」, 『日本研究教育年報』12, p.1-19, 東京外国語大学
- _____ (2010)「~てある」文と「~ておく」文の違いについて:文法構造の観点から」, 『言語・地域文化研究』16, p.203-213, 東京外国語大学大学院
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』, くろしお出版
- 中俣尚己(2011)「コーパス・ドライブン・アプローチによる日本語教育文法研究-「てある」と「~ておく」構文」を例として-」, 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』, ひつじ書房
- 富田美知子(1993)「有対他動詞の自動詞表現と受身表現」, 『人文論究』56, p.161-176 北海道教育大学函館人文学会
- 益岡隆志(1984)「「一てある」構文の文法」, 『言語研究』86, p.190-191
- 原沢伊都夫(1998)「テアル形の意味-テイル形との関係において」 『言語』28:9, p.13-24
- _____ (2005)「テアルの意味分析-意図性の観点から-」 『日本語文法』5:1, p.20-38

- 副島 健作(2009)「シテアル再考--他動性の観点から」『留学生教育』6, p.7-23, 琉球大学留学生センター
- 裴銀貞(2007)「Aハ(ガ)BヲVサレル」型受身文と「Aハ(ガ)BガVサレル」型受身文との比較」, 『日語日本学研究』62, p.231-250, 韓国日語日文学会
- _____ (2008a)「韓国人日本語学習者と日本語母語話者における結果相を表す表現の認識度の違いについて-「AガVラレテイル」文と「AガVテアル」文を中心に-」『日語日文学』40, p.73-90, 大韓日語日文学会
- _____ (2008b)「結果及び状態を表す「AガVテアル」文と「AガVラレテイル」文の比較分析」, 『日本語文学』39, p.49-69, 韓国日本語文学会
- _____ (2008c)「結果相を表す「AハBヲVサレテイル」型受身文と「AハBガVサレテイル」型受身文との比較」『日語日文学』37, p.37-52, 大韓日語日文学会
- _____ (2009)「書く・置くを述語とする「AガVテアル」文と「AガVラレテイル」文の比較」, 『日語日文学』42, p.137-158, 大韓日語日文学会
- _____ (2013a)「韓国人日本語学習者における「テアル」構文の理解度分析-中級以上の学習者を対象に-」, 『日語語教育研究』26, 韓国日本語教育学会, p.91-110.
- _____ (2013b)「能動型「テアル」構文と「テオク」構文との比較-共起環境を中心に-」『日語日文学研究』60, 大韓日語日文学会, p.59-75.
- 山崎恵(1996)「「～ておく」と「である」の関連性について」, 『日本語教育』88, p.13-24

【用例出典】

電子BOOK 朝日新聞社説・天声人語(社)1985~1991 日外アソシエーツ株式会社→(社説)出典が表示されていない例文は作例によるものである。

투 고 일 : 2015. 8. 31
심 사 일 : 2015. 9. 12
게재확정일 : 2015.10. 3